



庄村健家の釘隠し（写真は景観カタログ内部編より）

釘隠し

釘隠しは、束柱と長押を固定するときに釘頭を隠すための「装飾金物」です。有田では主に、鉄製や銅製のものが多く使われています。

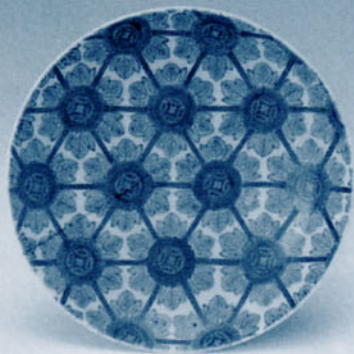
江戸期から昭和初期の建物まで、全ての時代に渡って釘隠しは使われていました。残念ながら現在にいたっては、釘隠しが使われている家はあまり多く残っていません。

使われている場所は、座敷などの格式の高い場所で、床の間の床柱に付いているものは、特に細かな模様が施されています。形としては、縁起ものにちなんだ模様や、動植物をモチーフしたものなど様々です。全てにおいて格調の高さがうかがえ、中には十二支があるという家もあります。

ある家主さんは「昔あった座敷は、ほんによかったばってんが、道ば広げたときに（昭和初期の道路拡幅）座敷ば切られてしもうたもんね。そんなとき、座敷にあった釘隠しはのうなってしもうたとよ」と、残念そうに話してくれました。

皿山びとの歌

鍋島藩窯と 副田氏



色絵菊花連鎖文皿
(有田陶磁美術館所蔵)

目にする様々なものに、秋の深まりを感じる今日このごろです。秋にはほかの季節にはない、しっとりと落ちついた風情があります。こういう季節には何かと気ぜわしい世俗を忘れて、芸術鑑賞や読書をと意気込みつつも、現実がちらつくのは、今流に言えば、ステージが低いからでしょうか。

いずれにせよ、秋といえば、そのイメージにピッタリなのが「鍋島」という焼き物でないかと思えます。そこからは、個々の強烈な自我は感じられない代わりに、重厚感に満ちた洗練された存在感がひしひしと伝わってきます。

「鍋島」とは、簡単にいえば、佐賀藩の藩窯でつくられた製品のことで、主に伊万里市の大川内山で生産されていました。人里離れた場所に窯場を築くことによって、その高度な技術の漏えいを防いだといわれています。

「鍋島」には、民間の窯場では許されなかった固有のスタイルや技法があります。皿はいわゆる木盃形と称される高台の高い形で、一般的に高台の側面に楯目文などの連続文様をめぐるしています。内面の主題となる文様の輪郭には、色絵であっても薄い染付の輪郭が配され、図案化された精緻で和風な図柄が独特な雰囲気醸成を醸しだしています。しかもこの形と図柄がぴったりとマッチし、そこはかたない崇高さすら感じさせてくれます。

藩窯が最初に設けられたのは、有田の岩谷川内であったと伝えられています。その後、寛文年間(1661~1673)に南川良に移り、延宝年間(1673~1681)に大川内山に移ったといえます。それを伝える最古の資料が「源姓副田氏系圖」という一文で、明治中ごろに著された久米邦武『有田皿山創業調子』の中に収められています。

ところで、この藩窯の設立や発展の経緯を語るには、どうしても欠くことのできない一族がいます。副田氏です。

「源姓副田氏系圖」によると、藩窯は前号で紹介した高原五郎七が岩谷川内で青磁の焼成に初めて成功して献上し、自ら御道具山と称したことに始まります。その後、五郎七はキリシタンの取締りの噂を聞き有田から逃亡してしまいましたが、その弟子であった副田喜佐衛門日清と善兵衛が、苦心して再興したといえます。この功によって、日清は手明槍(てあかりやり)という武士の身分と御道具山役という地位を与えられ、善兵衛は細工人頭取に任命されたといえます。

系図によると、その後も副田氏は代々御道具山役や大川内御陶器山役という藩窯の重要なポストを占め続けたと記しています。その一端は、より信ぴょう性の高い公的な記録でも確かめられます。

元禄6年(1693)に佐賀の藩庁から有田皿山代官にあてて「最近製品の質が落ちているから、精を出して良いものを作るよう、副田壱兵衛、副田喜佐衛門に申し伝えなさい」というような内容の文書が出されているのです。

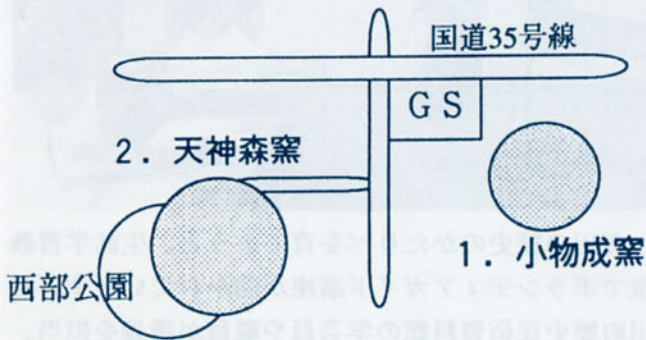
これによって、藩窯は有田皿山代官所の管轄下であり、現場の直接的な指揮を副田氏が行っていたことが分かります。

ところで、藩窯が大川内山に移った後も、そこで直接製陶に励んだのは、有田の中から選ばれた優秀な陶工たちであったといわれています。つまり、日本で最高レベルの技術を持った陶工たちが泉山の中で最高の陶石を用い、価格との折り合いなど全く考えずに作ったのが「鍋島」と称される焼き物なのです。これだけ最高なものを集めて生産しているわけですから、最高のものができる道理がありません。

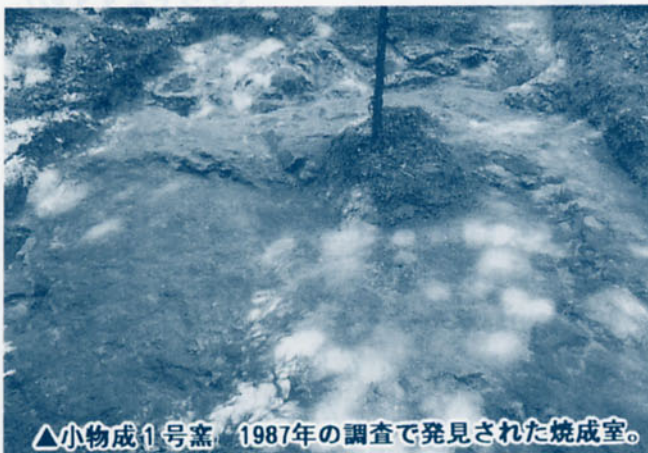
では、なぜこんなぜいたくな焼き物が必要だったのでしょか。とても現在では、こんな条件を満たすことすら困難ではないでしょうか。そうです。商品ではないからなのです。主に藩が将軍家や幕府の要職のある大名、公家など、VIPに対する贈り物用に作らせていたのです。

佐賀藩では、将軍家に毎月ながしかの贈り物をしていました。焼き物は11月に贈ることになっていました。まさに秋といえば「鍋島」の季節なのです。(村上 伸之)

小物成窯・天神森窯



今回は1995年度の発掘調査について、レポートします。8月1日～9日に小物成1号窯の調査を行い、8月10日より天神森窯の調査に入り、今なお継続中です。いずれも有田の西部地区にある有田焼の初期（16世紀末～1630年代）の窯で、有田の中では最も古くからある窯場と言えます。特に天神森窯は、おそらく技術的にみても当時の最高水準を誇る窯であり、有田川を挟んだ対岸の小溝上窯跡とともに、当時の窯業圏の中心であったと思われます。我が国の磁器発祥の窯である可能性も十分秘めています。

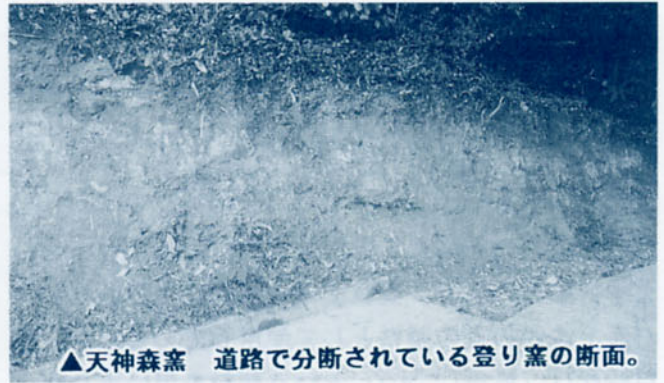


△小物成1号窯 1987年の調査で発見された焼成室。

1. 小物成1号窯

小物成1号窯については、1987年に試掘調査を行い、窯の位置は確認されていましたが、物原の範囲など詳しいことは分かっていませんでした。まず、調査は1987年に検出した窯体の位置を確認することから始めました。

窯体の位置を確認した後、その遺存範囲の確認を行いました。1987年に検出した遺構以外には窯体・物原ともに確認できず、窯体を崩した部分から製品や窯道具が出土するにとどまりました。



▲天神森窯 道路で分断されている登り窯の断面。

2. 天神森窯

天神森窯については1974年に発掘調査が行われ、少なくとも9基の登り窯が確認されています。今回は3号窯・4号窯を中心に調査する計画を立てました。1974年の調査については正式な報告書が刊行されておらず、概報に掲載されている少ない図面と写真に頼るしかありませんでしたが、それらの情報から窯の位置を特定するには、あまりにも地形が変わっていました。

それでも何とか位置を特定し、物原と思われる遺構から製品や窯道具の資料を得ることができました。唐津系の陶器と初期伊万里の磁器が両方見られます。磁器は染付がほとんどですが、青磁、白磁、瑠璃釉の製品もあります。陶器は灰釉が主体で、中には三島手や鉄釉の製品なども含まれています。

さらに、3号窯の下方を試掘したところ、窯体が検出されました。付近の崖にも焼成室と思われる断面が比較的広範囲に見られ、最低3基はありそうです。1974年の調査の際、この付近では2号窯と9号窯の2基しか確認されていませんから、まだ未発見の窯が眠っているようです。

天神森窯は磁器発祥の窯であるかもしれないという重要性の割には、遺跡は見過ごされてきました。3号窯・4号窯などの物原の大半は道路などによって、破壊されています。2号窯・9号窯なども登り窯本体が道路で分断されています。

こうした破壊は天神森窯に限ったことではありません。李参平ゆかりの窯と思われる小溝上窯にしても同様です。窯跡にはそれぞれの歴史があり、それぞれの重要性がありますが、天神森窯や小溝上窯など磁器発祥の可能性を秘めた窯は有田の原点とも言えるものです。

有田は「伝統」を標榜する一方で、その原点をすでに失いつつあります。 (野上 建紀)

焼物づくり 今昔

染付有田皿山職人尽し絵図大皿

6. 絵付け

「素焼き」を終えると次は素地に「絵付け」をします。染付の場合、現在では化学的に精製されたコバルトを絵の具の顔料として使用していますが、江戸時代は「呉須(ごす)」という顔料を用いました。

呉須を石臼で長時間すり、さらに乳鉢にとって細かくすって用います。呉須は天然の酸化コバルト化合物を含む鉱物で、当時は中国からの輸入に頼っていました。そのことは、江戸時代の貿易の記録の中にも見ることができます。

絵筆で文様を描く場合、「線描き」と「濃み(だみ)」の2つの作業に大きく分かれます。線描きは「線描き筆」で、文様の輪郭などを線で描いていくものです。一方、濃みは線描きを施した後に「濃み筆」という太い筆にたっぷり絵の具を含ませて、空白部分を塗り込めていく作業です。濃みは一般に女性の仕事とされていたようです。

また、絵筆で文様を描かない絵付け技法もありました。江戸時代のコンニャク印判や型紙摺りなどの印刷技法がそうです。コンニャク印判は材質は不明ですが、スタンプのように文様を付けていくものです。型紙摺りはあらかじめ紙に文様を細工しておいて、その紙を器にあてて絵の具を摺り込む技法です。

これらの技法の利点は同じ文様のものを数多く作れること、技術の習得が比較的容易であることなどです。いずれも有田では17世紀末～18世紀前半を中心に多用された後にすたれますが、近代に入ると印刷技法は印刷技術の発達とともに著しく進歩し、普及していきました。



染付有田皿山職人尽し絵図大皿の絵付け
右手の女性は呉須を石臼ですっている

ボランティアガイド講座



有田の歴史のかたりべを育てようと、生涯学習教室でボランティアガイド講座が開かれています。有田町歴史民俗資料館の学芸員や職員が講義を担当。町の歴史や焼き物の基礎知識を学んでいます。

受講生は、ちょっと難しい基礎知識に戸惑った様子でしたが、11月からは現地研修に入り、今では水を得た魚のように生き活きとしています。

有田を訪れる人に町の歴史や産業の素晴らしさを伝えたいと、郷土愛に燃えて、受講生一同頑張っています。



皿山雀

(さらやまずめ)

有田町歴史民俗資料館には、毎日、日本各地から見学者が来ますが、見学後にはアンケートをお願いしています。先日、東京から来た高校生が「有田焼に触ってみたい」と書いていました。東京の小学生からも「有田焼を見たいので送ってください」と手紙をもらいました。私たちは当然のように使っている有田焼ですが、よそから来る人にとっては不思議な魅力をもっているようです。「有田焼に触ってみたい」という願い、かなえる方法がないかと思案する今日このごろです。(る)

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報

No.31

発行年月日 * 平成7年11月1日

編集・発行 * 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地1

☎0955-43-2678 F A X 0955-43-4185

街角の歴史